世田谷文学館友の会
会 報　第５７号

２０２０年６月２６日

世田谷文学館友の会
〒157-0062
世田谷区南烏山1-10-10
TEL　03-5374-9111
FAX　03-5374-9120
ホームページ
http://setabuntomo.net/

世田谷文学館友の会二十周年記念講演
（共催　世田谷文学館）
世田谷文学館館長　菅野　昭正氏
「同人雑誌の時代」

同人雑誌「秩序」４号、９号、１０号と丸谷才一氏の添え書き

丸谷才一氏の編集担当として現役時代から退職後も交流が続き、氏が二〇一二年の十月に逝去されるひと月前に銀座伊東屋の買い物にお付き合いしたのが最後となってしまったのだが、その丸谷氏から退職後のある日、封書が届いた――片づけ物をしてゐたら、君がほしがってゐた物が出て来た。差上げます。春の舟　むかしの日々へ　まつしぐら　玩柴田光滋様――と記された添え書きとともに、古い同人雑誌「**秩序**」（一九五一年創刊）の束（全十号のうち三冊）が入っていた。これまで自身の本棚に大切に置いていたのだが、当友の会二十周年記念企画にあたり文学館館長の菅野昭正氏にその三冊をお見せして、同人雑誌の潮流について是非ご講演をとお願い申し上げた。菅野氏は戦後を代表する同人雑誌「**秩序**」の同人として丸谷才一、篠田一士、中山公男らとともにご活躍された生き字引なのである。昨年十一月、菅野氏によるご講演「同人雑誌の時代」を実現できたことは、世田谷文学館と友の会にとって記念すべき貴重な節目となった。

（友の会副会長・柴田　光滋）

精力的に話される菅野昭正館長

２０１９年１１月２９日
於・文学サロン
撮影・幾田充代氏

（以下、ご講演の要旨）

徳川幕府末期、幕府に仕えていた儒官の中村正直が一八六六年にイギリスへ留学、イギリスの総合学問である英学を学び、二年後の一八六八年、明治維新となり帰国し、翌年静岡で「同人社」という名称で私塾を創立したのが、日本の歴史上「同人」という言葉が現れた最初であろうということである。中村はイギリスで学んだ〝Coterie〟を「同じ理想、同じ志を持つ人」という意味で「同人」と翻訳したと思われる。

その後、イギリス、アメリカから西洋の学問を修めて帰国した森有礼も、福澤諭吉、西周、中村正直、加藤弘之（後の東京帝国大学総長）ら総勢十六名の同人を集って「明六社」を明治六年に結成する。月二回、順に講演し、活字にして発行した「**明六雑誌**」（一八七三―一八七五）は学問、思想の雑誌であったが同人雑誌の先駆けとなり、精神面の文明開化として明治日本に大きな影響を与えた。

やがて「文学的」な先駆けとなる同人雑誌「**我楽多文庫**」が小説家の尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案らによって硯友社より創刊された。後に長編小説『金色夜叉』で有名になる尾崎紅葉はまだ中堅どころにも至らない時期の雑誌であり、江戸戯作的作品が多かった。

本格的な文芸同人雑誌となるのが「**ホトトギス**」（一八九七年創刊）である。松山の俳人・柳原極堂が創刊した後、応援していた正岡子規らの居る東京に本拠を移し、高浜虚子が二十四歳で主宰を務めることになった。俳句中心であったが、小説や詩など、また同人外からの寄稿もあり、夏目漱石の小説『吾輩は猫である』、『坊っちゃん』を連載したことでも知られる。明治期には総合文芸誌として、大正・昭和初期には俳壇の最有力誌として隆盛を誇った。

明治晩年には、学生仲間の文学志望者たちで雑誌をつくるという同人雑誌が盛んになった。学生による学生のための雑誌である。自分たちでお金を出し合い、雑誌を書店に置いて貰うなどの交渉もした。それが「**新思潮**」である。一九〇七年（明治四〇）、東京帝国大学英文科を卒業したばかりの小山内薫が創刊、チェーホフの翻訳やイプセン研究会の記録など演劇雑誌であったが、これを皮切りに帝大系の同人誌として「**第二次新思潮**」一九一〇

年（明治四三）、**「第三次新思潮」**一九一四年（大正三）、**「第四次新思潮」**一九一六年（大正五）と後に続くことになる。第二次は学生作家、谷崎潤一郎が『刺青』を発表。第三次は大正二年に帝大に入学したばかりの芥川龍之介が『老年』を発表。第四次は、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、豊島與志雄らがいずれも短編小説を発表したが、とりわけ芥川龍之介が第四次創刊号に掲載した『鼻』が漱石に絶賛される。彼ら新思潮派は大正文学の一つの拠点になった。

大正時代のもうひとつの有力な文芸雑誌として**「白樺」**一九一〇年（明治四三）創刊を挙げたい。武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎、長與善郎、里見弴ら学習院の関係者が多く集り、後世に残る数々の作品を発表した。彼らは文芸雑誌と自負していたが、学生を主体とした同人雑誌であることに変わりはない。

高見順がのちに書いているように、昭和初期は同人誌の最盛期だった。小林秀雄、永井龍男、富永太郎らの**「山繭」**、コミュニスト、アナキスト文士が集った**「文芸戦線」**、新感覚派と呼ばれる横光利一、川端康成らの**「文芸時代」**、京都三高の在学生・OBが組み、後に梶井基次郎作の『檸檬』が掲載された**「青空」**の四誌が同じ大正一三年に創刊され、翌々一五年には中野重治、堀辰雄らの詩誌**「驢馬」**（ろば）が、昭和四年には河上徹太郎、中原中也、大岡昇平らの**「白痴群」**が生まれている。そして昭和八年には川端康成、小林秀雄、林房雄が中心となった**「文学界」**が創刊された。この雑誌は昭和一一年（一九三六）には文芸春秋社から発行されるようになり、同人は二十三人になったが、昭和一九年、戦時の〝雑誌統合令〟で廃刊。この年までおよそ八十誌存在した文学同人誌は八誌に強制統合され、最後は一誌になってしまう。

終戦の翌昭和二一年（一九四六）、戦前左翼運動にかかわっていた荒正人、埴谷雄高、佐々木基一ら評論家七人が〝政治と文学〟を大テーマとした**「近代文学」**を創刊、井上光晴など戦後作家と呼ばれる人たちはおおむねその同人として活動し、影響を深めた。そういう時代でもあった。**「文学界」**はその翌年、丹羽文雄、舟橋聖一らが同人となって文学界社から復刊、次年から文藝春秋新社の発行となる。

昭和二一年、新しい時代の学生の思想的連帯を謳って、飯田桃、中村稔、小川徹、吉行淳之介ら東大生を中心に作られた**「世代」**は、しばらくは総合誌として命脈を保ったが、やがて純粋の同人誌に変わる。私は誘われて二五年にその仲間に加わった。翌年十一月号の**「文学界」**同人雑誌評で、臼井吉見氏が恥ずかしながら私の「堀辰雄論」に触れ「青年の筆でなければ書けないものが示されている」と。私にも青年だったことがあったのだ(笑)。同二一年には大岡信、日野啓三、佐野洋らの**「現代文学」**も創刊されている。

丸谷才一、篠田一士、中山公男が中心となり、仏文の清水徹、三輪英彦、橋本一明、独文の川村二郎、英文の永川玲二、高松雄一ら東大文学部卒が集って昭和二六年に誕生したのが**「秩序」**。私がここへたどり着いたのは二九年だった。新しい海外文学を受容・理解し、日本文学には欠落し、或いは未熟であるものに目をつけて現代の文学状況に裨益したい、という若気の至りの抱負を誇りとしていた。戦後の「第二の開国」時代とはそういう時代だったのだ。この誌唯一の連載長編が丸谷さんの処女作『エホバの顔を避けて』である。

山本健吉は同人雑誌評（「文学界」昭和二七年五月号）で**「世代」**と**「秩序」**に触れ、「私は（この二誌に）大いに期待したい。**「世代」**の方が野性的で（中略）自分たちの「世代」という意識が強いようだ。**「秩序」**の方はむしろ学究的。この「荒地」のような今日の精神風景に抵抗して、精神の秩序への志向があらわに出ているようだ」と対比している。**「秩序」**の終刊第十号は昭和三七年刊だから十一年間に十冊、まさに年刊雑誌（笑）。

全国の文学同人雑誌数が今日、大きく減っているのは文学全般の低迷と相関している。これはひとつには政治の責任だといいたい。戦後呼号された「文化国家」に代わり、今は「経済国家」。精神的なこと、内面のことに意識が届かなくなってきた時代、今日よりも明日、もっといいものを着たい、食べたいが先立つ時代。文学一般に関心が薄れ、文学に触れることによって感情表現を豊かにする期待は衰弱している。その一方、漫画同人誌が増えていると聞くが、流れはそちらの方へ変っているのだろうか。

といっても、最新の「文芸年鑑」によると、全国の同人誌数は三四八（東京八一）とあり、先般開かれた「全国同人誌大会」には一二〇人余が参加したそうだから、必ずしも停滞とは言えないと思いたいところである。

（文責　友の会会員・竹内修司）

【友の会からのお願い】

二〇二〇年四月十一日に開催を予定していました年次総会が新型コロナウイルス感染症防止対策のため延期となりましたので、二〇一九年度事業報告及び二〇二〇年度事業計画案に関する暫定資料を本会報に同封させていただきます。本年度総会は秋季の開催を目指しますが、その間、同内容に対して暫定ご承認をいただきますようお願い申し上げます。なお、ご異議等ございます場合は、友の会宛にお手紙、お電話等にてご連絡いただければ幸いです。

シリーズ　世田谷とわたし　第九回

〝いつのまにかもどってくる〟

鴻巣　友季子

わたしの知る限り、文筆業にはよく引っ越しをする人が多い。先日も、作家のKさんがこの六年に十回だったか、十年に六回だったか、引っ越しをしたと聞いて驚いた。文学者や芸術家などが多く住む世田谷区の成城にもしばらく暮らしたそうだ。

わたしはと言うと、引っ越し経験はかなり少ない。生まれてから、二回だけ。生まれたところ（正確には産婦人科病院だが）も、次に越した家も、いまの住まいもすべて世田谷区内である。ほかの区や市にも散々足を伸ばして家を探し、気に入った土地もたくさんあったが、気がつくと世田谷にもどっていた。

根っからの「山手育ち」ということになるが、父は中央区の茅場町の出である。宵越しの金は持たないというような典型的な江戸っ子気質で、ばりばりの江戸弁を話した。ぽんぽん言葉を投げあい、押しの強い下町の親戚勢の前に出ると、わたしはどうも気圧されるというか、「世田谷の娘さん」という存在はパンチに欠け、いくぶん引け目を感じたものである。

とはいえ、世田谷は世田谷独自の主張やカラーを強く押し出しすぎないところが、わたしには住みやすいのだと思う。都心に近いわりに〝田舎〟の面もある。わたしが二十歳すぎまで（バブル経済の前）は、ごくふつうに農家と畑が住宅地のなかにあったし、小学校の隣には牧場があって、よく牛などの写生に行った。世田谷はいまものどかな雰囲気だが、そういうローカル色を打ちだすこだわりはあまりなく、かといって、郊外地にありがちな洗練志向のようなものも強くない。肩ひじ張らず、おっとりしているのだ。

世田谷区には、古いものと新しいものが気負いなく融けあっている。代官屋敷や、小京都とも言われる烏山寺町、一方、洒落たパティスリーや当世風のバルや、ブックカフェなどが古くからの商店街に点在する。センスの良い花屋さんが多いところも好ましい。

内井昭蔵設計の世田谷美術館（わたしのなかでは、まだ〝新しい建築物〟の部類に入る）は、何十回足を踏み入れても清新な高揚感がある。森のなかに佇むような世田谷文学館の静けさも好きだ。

世田谷線にはことさら愛着がある。わたしが子どもの頃は「玉電」と呼ばれ、車両は今のようなカラフルな色彩ではなく、濃緑（こみどり）のソリッドカラーだった。運賃は大人十円、小人は五円。五円玉を握りしめて、料金箱に入れた。

大人になってから、世田谷区民でありがたかったものといえば、区の認可保育園だ。ここでの集団生活で子どもは大家族のようなにぎやかな暮らしを体験できたし、わたしは園の助けがなければ、ミッチェルの『風と共に去りぬ』も、ウルフの『灯台へ』も訳し通せなかったろう。保育園は親離れ、子離れの自然な助走路にもなった。

そうして子どもは頼りない母親をよそに、独立心旺盛な子に育った。自分で勉強したいことを見つけて、十五歳で親元を巣立ち、国外へ「引っ越して」いった。ときどき、豪徳寺の猫もなかや、世田谷名物のたい焼きが無性に食べたくなるという。外国暮らしでも、根はやはり世田谷っ子のようだ。

（作家・翻訳家）

執筆者紹介
著訳書　ブロンテ『嵐が丘』、シェイクスピア『ロミオとジュリエット』『謎とき『風と共に去りぬ』』他多数。世田谷区在住。

ヨソの文学館・記念館

【雪国の宿　高半　文学資料館・かすみの間】

「国境のトンネルを抜けると、窓の外の夜の底が白くなった。」これは、川端康成の小説『雪国』初版単行本（創元社、昭和十二年）が「国境の長いトンネルを抜けると雪国だった。夜の底が白くなった。」という書き出しで刊行され我々の心に馴染んでいく前に綴られた初出誌版の冒頭文である。しかも、その版は「夕景色の鏡」（文芸春秋、昭和十年）と題され、「雪国」という文言は題名にも冒頭文にもない。各雑誌に断続的に断章が書きつがれ、最初から起承転結を持つ長編としての構想が纏められていたわけではなかった。

湯沢温泉の高台に位置する最古の湯元「高半」は川端康成『雪国』執筆の宿として有名である。執筆の部屋「かすみの間」からは湯沢の街並みや魚野川の清流、上越国境の山々が一望でき、眼下には上越線が走っている。隣接する展示室は充実しており、川端作品や直筆の色紙、駒子のモデルとなった芸者松栄（小高キク）に関する当時の新聞記事なども興味深い。川端以外にも与謝野寛・晶子夫妻や北原白秋夫妻も来湯し歌を書き残している。高半本館二階の一角を占めるここは文学資料館として入館料（宿泊者は無料）と鑑賞時間が設定されている。残る二階の広いスペースは一帯に数百冊の書籍が並ぶ図書コーナー。夜八時、二時間十五分にも及ぶ映画「雪国」が一階の大スクリーン室で毎日上映される。高半、いや湯沢そのものが文学館のようだ。この地の風に吹かれ、日本人初ノーベル文学賞作家の真の姿は、ただただ努力の人ではなかったかと気付く。

住　所　新潟県南魚沼郡湯沢町大字湯沢九二三
電　話　〇二五―七八四―三三三三
入館料　五〇〇円、宿泊者無料

（友の会会員　幾田充代）

新春散歩
「オリンピックスタジアムへ続く道」

堀　恭子

新春一月十七日、穏やかな日和に恵まれ、表参道駅前からブランド店が連なる街路を抜けて、港区立青南小学校正門脇の中村草田男の句碑見学からスタート。〈降る雪や明治は遠くなりにけり〉は、草田男が大学生であった昭和六（一九三一）年に母校を訪れた際の大雪を詠んだ句。明治から大正を経て、昭和へと移りゆく時代への感慨が伝わってくる。

私にとって青南小は六十余年前に学んだ母校。正門近くの碑に、♫代々木の森の霧晴れてさんさん昇る朝日影♫の懐かしい校歌が刻まれていた。終戦後の復興期のクラスには近所や越境の子が入り混じり、皆元気いっぱい。正門の教育目標に「よく考える子・体をきたえる子・思いやりのある子」とあり、先生も親も伸び伸びと育ててくれた。校庭では男子はメンコ、相撲、女子は石けり、鬼ごっこなど、神宮外苑は格好の遊び場であった。お正月に先生が自宅にクラスの生徒を招き、ご馳走になったお汁粉の味は忘れられない。そんな思い出が蘇った。

五分程歩いて斎藤茂吉の「童馬山房」（「青山脳病院」）跡へ。跡地のマンションの入口に師・伊藤左千夫を追悼する〈あかあかと一本の道通りたり霊剋（たまきは）る我が命なりけり〉の歌碑があった。東京タワーを仰ぎながら青山霊園まで歩き、文人墓碑を巡る。国木田独歩、吉井勇と続き、吉井勇の墓前では『ゴンドラの唄』♫いのち短し～♫を合唱。続いて宮本百合子、志賀直哉、斎藤茂吉を巡る。志賀直哉の墓は、敬愛した祖父直道、対立した父直温の墓の横に並んでいた。直哉が山手線で事故に遭い、養生のため逗留した城崎温泉での体験を描いた『城の崎にて』の冒頭の朗読（会員・堀伸雄氏）を聴く。茂吉の墓は、大久保利通の巨大な墓の傍らにあり、本人の自筆で「茂吉之墓」と刻まれていた。派名となったアララギが植えられているとのことで、〝あの樹だ、この樹だ〟との一幕も。

国道二四六号を横断、スタジアム通りを進む。行く手には隈研吾氏設計の新「国立競技場」（オリンピックスタジアム）の威容が迫る。「日本オリンピックミュージアム」の近くにある岸清一、クーベルタン、嘉納治五郎の各像、聖火台のレプリカなどを見学。日本青年館九階レストランで昼食後、ミュージアムに入館。迫力ある競技映像が流れ、二階には開催国の聖火トーチやメダルなどの展示のほか、ジャンプ力などを五輪選手と比較できる体験コーナーも。夏のオリンピック入場チケットの抽選には全て外れてしまったが、見学しているうちに高揚感に包まれた。

旧き文士を偲ぶ一方で、近代的なオリンピック会場周辺を歩き、時代の流れを体感する新春散歩であった。周到にご準備いただいた運営委員の皆様に感謝をお伝えしたい。

（友の会会員）

２０２０年1月１７日「新春散歩」
左：新「国立競技場」をバックに日本オリンピックミュージアム前の広場にて（参加者 38 名、3 班を組み歩行）。
右：青山霊園にて志賀直哉『城の崎にて』朗読風景。斎藤茂吉墓石の敷地にはイチイの木（別名・アララギ）があった。

撮影・大江美子氏

講座「石川啄木とロシア文学」を聴いて

五十畑　徹

日に日に衰えていく我が頭脳に久しぶりに「痛・気持いい」一撃をもらった。

大木昭男先生がその作成に相当な時間を費やしたであろう、丁寧なレジュメ。それに沿った、とても刺激的で豊かな内容の講義だった。それは時折「朗唱」であり、「音楽」でもあった。

冒頭のゴーリキイの「鷹の歌」。啄木が初めて触れ、感銘を受けたロシア文学作品とのこと。先生の解説のおかげで、小生もその美しさに少し近づくことができた。

先生は啄木の作品を三つの段階（第一段階のロマンチシズム、第二段階の自然主義、第三段階の社会主義）に分けて、それぞれ、具体的な作品をレジュメに落とし、かつ丁寧に読み聞かせて下さった。

第一段階の処女詩集『あこがれ』の「啄木（きつつきどり）」という詩にはびっくり。十八歳がこれほど格調高い文語体の作品を生み出すとは。

第二段階の第一歌集があの『一握の砂』。啄木二十四歳。「東海の小島の…」「はたらけど…」といったよく知られた歌が収められている。更に、「生後二十四日」にて逝ってしまった長男を想う悲しい歌も。

そして、函館・青柳町での不運（何とか二つの職を得るものの、「大火」によりそのいずれの職場も燃え落ちてしまう）が襲い、再び、放浪の生活へ。

こうした「人生の落伍者」の自覚から、啄木は、第三段階の社会主義に傾倒していく。それは、第二歌集『悲しき玩具』（啄木の友人「土岐哀果」がタイトルを付け、奔走し、啄木の死後二ケ月で出版される）に収められた歌に読み取れる。

そして『ローマ字日記』に記されている「新小説」を巡る、「近藤典彦説」と「大木昭男（先生）説」との対比が楽しい。受講後、図書館で、『ローマ字日記』の全文を読んでみたら、驚くべき描写があった（ここではその内容は書けないが）。

ところで、啄木を主人公にした映画、演劇、テレビドラマがいくつか作られている。演劇、テレビドラマは無理だが、映画なら今でも観られるかも、と考え、近い内に、TSUTAYA に行って調べてみよう。

あの日、天才・啄木に少しでも近づける機会を作って下さった大木昭男先生に感謝。（友の会会員）

（二〇一九年十月十一日　世田谷文学館にて開催）

講座　「異才が火花―『洋酒天国』から出発した開高健、山口瞳」を聴いて

大久保　博

講師の小玉武先生は、世田谷文学館友の会と縁の深い先生である。八年ほど前に府中のサントリービール工場の試飲会を含む武蔵野文学散歩でお話をされており今回で二度目の講演である。

小玉先生は初めに『洋酒天国』が作られた背景と開高健の生い立ちからお話をされた。開高は昭和五年、大阪市天王寺区生まれの生粋の大阪人であり、名門の天王寺中学校に入学する。ただ、不幸にもその五月に国民学校の教頭だった父親が、外食した際にバクダンとかカストリとかいった悪酒を呑んだために亡くなって、開高の生活環境が変わったと、元サントリー株式会社の広報部長さんだった先生らしい話も披露する。

天王寺中学校の一年先輩に谷澤永一がいた。谷澤とは町のフランス語塾で知り合い、この谷澤との交流が開高の一生を左右した。開高は谷澤が起した同人雑誌『えんぴつ』に参加する。そして壽屋（現サントリー）の社員だった牧羊子（本名・金城初子）が、偶然に、書店にあった『えんぴつ』を買って、雑誌に告知されていた合評会に出席して物怖じせずに自説を述べると、谷澤、向井敏、開高らは凄い人が来たとみんなびっくりしたといい、開高は牧羊子に一目惚れしたという。この出来事が、開高健が壽屋に入るきっかけとなったのだから縁は異なもの味なものである。

さらに、先生は、壽屋の経営を担うことになった佐治敬三の経歴や雑誌『ホームサイエンス』の発行、終刊。そしてＰＲ誌『洋酒天国』の創刊の経緯を話された。牧羊子は開高健と結婚し、開高は羊子の代わりに壽屋に入社することになる。開高は販売促進誌『発展』の編集と取材を任された。佐治敬三の人物評価の目の高さを物語る一つである。モーツァルトのレコードがかかり自由な雰囲気がある壽屋の広告部・サロンの様子にも触れられた。私は、宣伝広告活動は何にもまして発想を育む人材・環境を大事にするものだと理解した。

二〇一九年九月に発行された『開高健のパリ』では、パリが開高にとって因縁の都市だった事、そして『夏の闇』のモデル問題に触れ、開高と付合っていたパリの女性とボンにもいる別の女性を小説の中で一人の「女」として描いたのだろうと先生は謎解きをする。

また、山口瞳と開高の両人が文学賞の受賞が意外に少ないのは、幾多の文学賞の選考委員だった中村真一郎と山口瞳がお互いに馬が合わなかった事などを指摘する。例えば、中村が山口を日本文学大賞に推薦しなかったのは、山口がサラリーマンとしての定額の収入があったので、賞金の必要がなかったと考えたからであろうと話された。その辺の人間関係の綾をもう少し伺いたかったが、時間がたりなかったのは残念だ。

私は、開高の〈「人間」らしくやりたいナ。〉の言葉を呟き、サントリープレミアムモルツを手にして、小玉武先生に感謝しつつ講演を振り返った。

（友の会会員）

小玉武氏　懐かしいエピソード満載の講義風景

２０１９年１１月８日

世田谷文学館にて

撮影・幾田充代氏

講座
「枕草子への招待 ―― 成立の謎を解き明かす」（全二回）を受講して

第一回　詠歌を免除された清少納言
第二回　『枕草子』の「枕」とは何か

齊田　裕子

「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎは」で始まる『枕草子』、誰でも高校時代一度は触れている。若い頃は古典は遠い存在であったが、年を重ねて読みたくなるのは不思議である。平成二十七年度に拝聴した津島知明先生の講座がとても素晴しかったので、今回の連続講座を心待ちにしていた。先ずは跋文から、成立の謎を説明して下さる。

定子の女房のひとりであった清少納言は、世にいう「長徳の政変」で里下がりをすることになった。その時期に、実際にあったことなどを書いたのだが、定子以外には見せるつもりがなかったにもかかわらず、その草子（初稿本枕草子）は、世の中に広まってしまった。

当時、女房達は歌にして報告するのが仕事であったが、清少納言は稀代の歌人清原元輔の娘であったのに、歌が苦手であった。懇願され再び定子の元に戻った折、歌を詠む代わりに枕草子を書くことに。当時紙は大変貴重であったが、定子は兄伊周から上質の紙を大量に与えられ、帝（夫の一条天皇）は中国の歴史書である史記を書かせたけれど、あなたは何にするかと清少納言にたずねると、では「枕（草子）にします」との答えに、「ならば受け取りなさい」と言った。当時定子を中心とした宮廷サロンが形成されていたが、清少納言はそれに挑戦して、後世に残る随筆、いわゆる再編本の『枕草子』が書かれたのである。

定子は兄伊周が思慮分別なく道長に対立して起した長徳の政変で栄華から凋落してしまう。絶望のあまり自ら髪を切り、二十歳という若さで出家していた。当時女性の出家は夫との離別を意味したが、一条天皇の寵愛は無くならなかった。『枕草子』は、このような悲運の状況のなかで書かれ始めた。定子サロンは明るいことばかりか、どちらかというと暗いなかであったが、そのようなことはおくびにもださず明るい章段が生まれた。

定子を慕い定子をあがめ、定子サロンを生き生きと描いた清少納言は前向きな機智に富んだ女性であったと思われる。恋に仕事に全力投球する姿は現代の私たちにも大変魅力的である。『枕草子』が、政治に目をむけるのではなく、日常の些事を描いたのは、時の権力者道長ににらまれず生き延びるための戦術であったのだ。

平安時代に書かれ、今なお人々を魅了するのは、その歯切れのいいウィットに富んだ文章である。清少納言と定子の漢文の教養の深いやりとり、定子を慕う清少納言の愛情の深さもまた魅力である。

平安を代表する清少納言と紫式部、二人の才媛から友達を選ぶなら清少納言だ。自分をなかに押し込んで内面を見せない紫式部とはつきあえないような気がする。今まで訳文でしか読んでいない『枕草子』、今度は是非原文に挑戦したいと思った講座であった。

（友の会会員）

（二月七日・十四日、世田谷文学館にて）

わたしの一冊
『源氏物語湖月抄』
（全八冊、上下帙入り）
北村　季吟著
大阪 積善舘 発行
明治二四年三月初版
〃 三六年九月二五版
遠藤　雅子

冒頭の桐壷、雨夜の品定め、六条御息所、須磨、明石、柏木、薫と匂宮など断片だけで、『源氏物語』を通して読んだのは瀬戸内寂聴訳が初めてだった。源氏の周りは個性的な人物達で、帖を追う毎に系図が入り組む。栄華の世を存分に振る舞う権力者達、彼らに向ける賛美の眼差しに、憂いを感じた。続いて橋本治『窯変源氏物語』、林望訳を、谷崎潤一郎訳と原文を傍らに、引き込まれて読んだ。物語は、彼らの喜びや悲しみ、時には苦悩やウイットが、交わす和歌と共におおらかに連綿と展開する。紫式部の教養と構想力、人間味に圧倒されたが、ストーリーを追ったところで、マイブームは鳴りを潜めた。

ところが一昨年、旧友の亡き母上（王朝女流文学研究）の蔵書『源氏物語湖月抄』を譲られることに！

大事に保管されたものの、布貼りの帙は辛うじて繋がっている箇所やコハゼの欠損など劣化が激しい。肝心の本文は比較的良好だった。そこで、オリジナルは別に保存し、新たな帙作りを試みる。埃を吸う布の代わりに包装紙を貼り、コハゼを付ける。保管用の函も作り、書名ラベルを貼って、新装版が出来た。

『源氏物語』は、王朝文化を誇る権力者達の下で写しや注釈書が作られ、研究が進められた。印刷技術の向上で、民衆にも広まり読まれるようになる。後続注釈書の基準とも目された『湖月抄』を、現代の似た風潮を憂えつつ、本文を解読することが次の課題である。

（友の会会員）

世田谷区民ではないけれど……

〝電車二本で〟
～埼玉県より～

大岡　玲子

だいぶ前のことになりますが丸谷才一氏の講演会があるのを知って、初めて世田谷文学館に来ました。芦花公園は、学生時代に来たことがありますが、武蔵野の面影を残した郊外といった趣でしたが、すっかり閑静な住宅街になっていました。駅からも近く便利に思えました。通りから入る小道に森繁久彌氏が書かれた「世田谷文学館」の控えめな文字が目に入りました。池には大きな鯉が優雅に泳ぎ、日常を少し忘れ、文学の世界に誘ってくれるアプローチになっていました。丸谷才一氏の講演会は、抽選には漏れ、講演後のビデオ鑑賞になりましたが、退場される氏は拝見できました。

これを機に友の会に入会させて頂きました。区外から来る者にも気持ちよく接してくださいました。

結婚を機に埼玉に住んでいます。電車二本で来られるのですが、魅力のある講座すべてには出られなく残念に思うことも度々あります。時々参加させて頂く「文学散歩」では、説明してくださる内容が書物では得られない内容があります。「前橋の文学散歩」では、萩原朔太郎が「南京陥落の日に」を書いた後詩を書くペンを折ったことを知りました。

「茨木のり子展」の折、雑誌『装苑』が展示されていました。洋裁をしていた亡き母は、毎月『装苑』を購入していました。『装苑』には、雑誌の少なかった時代、洋裁だけでなく文化的な情報も満載されていました。表紙をめくると第一頁目に「私がきれいだった時」の詩があり、感動したことを覚えています。残念ながら展示されていたのは、その詩ではありませんでした。母が残した大量の本は処分してしまいましたので、もしあったらと悔やまれました。

広い意味で文学的なのでしょう。「ヒグチユウコ展」は、娘と楽しく鑑賞しました。若い人達も、大勢来場していました。先日は姉と「歌舞伎座ギャラリー見学会」に参加させて頂き、有意義な時を過ごしました。

これからも素晴らしい企画を期待しております。友の会ボランティアでお世話してくださっている方達に感謝しております。

（友の会会員）

わたしのお薦め作品

内村 鑑三著・鈴木 範久訳
『代表的日本人』　岩波文庫刊

鈴木　美奈子

日本人が「日本人」を意識したのは近世の半ばのこと、新井白石あたりがそのことを意識した最初の知識人だったと言われる。明治維新の富国強兵・殖産興業の西欧化の波の中、日本の良さを見直そうという流れが徳富蘇峰らによって生まれ、さらに日本を訪れたフェノロサやハーンなど外国人は日本人以上に日本文化に価値を見出していた。当の日本人があらためて日本に眼を向けたのはフェノロサに教えを受けた岡倉天心など。かくして明治中期になると有名な日本人論が次々と書かれる。内村鑑三の『代表的日本人』（一八九四）、新渡戸稲造の『武士道』（一八九九）、岡倉天心『茶の本』（一九〇六）などで、この三冊とも英文で書かれたものであった。

この三冊のうち、著者の友人ハリス夫人に献げられた『代表的日本人』を取り上げてみた。代表的日本人の五人とは……

西郷隆盛　―　新日本の創設者
上杉鷹山　―　封建領主
二宮尊徳　―　農民聖者
中江藤樹　―　村の先生
日蓮上人　―　仏僧

とくに西郷と日蓮に愛着が深く、特に西郷。もしわが国の歴史からもっとも偉大な人物を二人挙げるとすれば、太閤と西郷、と言う。しかし太閤はナポレオンに似てほら吹きの面と、生まれつきの天才的な偉大さがあった。西郷は違う、クロムウェルのピューリタニズムに似た純粋な意志、道徳的な偉大さがあったと言う。この西郷への思い入れは、「一八六八年の維新革命は西郷の革命であった」との評に如実である。そして、最終章の「謀反人としての西郷」……。革命の雄たる彼が、新政府に闘いを挑んだ五千人もの若者を前にして自己の生命、名誉など一切を犠牲にした「情のもろさ」もまた西郷であった。

「敬天愛人」……、偉大なる人間くささ。

（友の会会員）

（**「せたぶん・うおっちんぐ」**は、今回お休みしました。）

～こういう催しがありました～（２０１９年１０月～２０２０年３月）

【講演・講座】 （企画委員会）

月　日	講演・講座名	講　師	内　　容
2019 年 10 月 11 日	講座 石川啄木とロシア文学	大木　昭男氏	石川啄木がその短い人生において三段階の文学的思想的進化の道を歩んだことを紹介し、特に第三段階で、現実を傍観しているだけの自然主義から脱却し、社会主義的な時期に達したことに着目。その間に啄木が愛読したロシア文学を紹介し、啄木にとってロシア文学がどのようなものであったかを解説された。
11 月 8 日	講座 異才が火花 ―『洋酒天国』から出発した開高健、山口瞳	小玉　武氏	もとサントリー社員であった講師が、開高健、山口瞳のエッセイ集の編集を担当した経験をもとに、昭和３０年代の『洋酒天国』時代から最晩年に至るまでの、両作家の職場や文壇での印象深いエピソードを語られた。
11 月 29 日	世田谷文学館友の会２０周年記念講演「同人雑誌の時代」 世田谷文学館館長 菅野 昭正氏 （文学館と共催）	菅野　昭正氏	明治から昭和にかけて文学界で大きな存在感を示してきた同人雑誌の歩みを、自ら戦後を代表する雑誌『秩序』の同人として、丸谷才一氏、篠田一士氏等と共に活躍された講師が、同人誌の文人仲間を偲びつつ、時にはユーモアを交えて、当時の文学の潮流を味わい深く語られた。
2020 年 2 月 7 日 2 月 14 日	講座 枕草子への招待 ―― 成立の謎を解き明かす （全２回）	津島　知明氏	清少納言『枕草子』が、何を契機に書き始められ、どのように流布していったのか。作者の記述の解釈が専門家の間でも確定していない中で、「跋文（ばつぶん）」と呼ばれる最終段に着目し、講師独自の見解に基づき、『枕草子』の成立の事情や「枕」の意味するところを解説された。

【散歩】

月　日	散　歩　名	案　内	内　　容
2020 年 1 月 17 日	新春散歩　オリンピックスタジアムへ続く道 ～南青山（中村草田男、斎藤茂吉）、青山霊園（国木田独歩、吉井勇、宮本百合子、志賀直哉、斎藤茂吉）、新国立競技場周辺～	友の会担当者	表参道を出発、中村草田男の句碑、「童馬山房」跡の斎藤茂吉の歌碑を訪れた後、都立青山霊園へ。国木田独歩、吉井勇、宮本百合子、志賀直哉、斎藤茂吉の墓を巡る。吉井勇の墓前で「ゴンドラの唄」を斉唱、直哉の「城の崎にて」の一節の朗読も。その後、スタジアム通りを経て、新しい国立競技場の外観、オリンピック初参加に尽力した教育者・嘉納治五郎の像、日本オリンピックミュージアムなどを見学。

編集後記

ここ数か月、新型コロナウイルス感染予防で、人々は皆余儀なく不自由な日常を強いられてしまいました。そして家に籠もりながらも出来ることをと各々が工夫しているように思います。

そのような中私はたまたま目にした記事で、独特な奏法のカナダ人ピアニスト、グレン・グールドの死の床の枕辺に、書き込みだらけの『草枕』があったと知り衝撃を受けました。『魔の山』などと並び、愛読書の一冊だったそうです。

そこで彼が何に惹かれ何を読み取ったのかとの思いで漱石の『草枕』を繙きました。勿論すぐに答えを引き出せる筈もありませんが、遠い異国の作品を死の床の枕辺に置いたグールド、置かれた漱石には、恐らく何か共鳴し合う芸術に対する考え、又清く流れる小川の如きテンポとリズムに共通するものがあるように感じました。ふたりの清澄な世界に誘われました。　　（森　ゆり子）